

【90】郵便切手の衰亡

I T 万能の情報化時代になり、紙の手紙や葉書をやりとりすることが著しく少なくなりましたが、その波及で郵便切手の比重も下がってきています。

かつて切手はその国の文化水準を表すとまで言われ、そのデザインの美しさと印刷技術を自慢しあったものです。

敗戦後の日本は国土は荒れ、都市は焼野原となり、見るべきものが少なくなった中で、切手の水準向上に力を入れ（経費がかからないことも理由でしょうが）、国立公園切手、文化人切手、国民体育大会の切手などいろいろ理由をつけて多種の切手を発行しました。

日常使用される巾 2 c m 縦 2.5 c m の味も素っ気も無い切手（通常切手）に対し、こういう特別の切手は記念切手や特殊切手と呼ばれ、大きさも大きく、デザインに優れ、印刷も上等で美しいものでした。

従って、実際の手紙に張って使うわけでもないのに、使用済みのものも含め、切手そのものを入手してストックブックに保存して眺めて楽しむという趣味が成立しました。

これは洋の東西を問わず、とくに郵便の先進国のイギリスでも、切手収集は古くから、高尚な趣味とされ、古い切手は一種の骨董品として高価格で取引されました。

趣味で切手が売れるのは当時の郵政省にとってもありがたいことで、「切手趣味週間」というのが早くも昭和 22 年（1947）に設けられ、趣味の切手収集を大いに P R しました。

〇〇週間というのは、今では沢山ありますが、切手趣味週間は「愛鳥週間」（バードウィーク）などと古いものの一つです。

昭和 23 年（1948）の切手趣味週間に発行された「見返り美人」切手は、縦長の大型のもので今に至るまで、わが国の切手史上最大の大きさを誇ります。

食物にも不自由する貧しい時代に、費用もあまりかからないので、切手収集は当時の小中学生の人気ある趣味として大流行しました。

デパートには必ず趣味の切手コーナーがあったほどでした。

その後、幾星霜、手紙の衰亡とともに郵便切手への関心は薄れ、郵政省当局も年に一度の切手趣味週間の記念切手は格別、その他の特殊切手に力が入らなくなりました。

伝統的なノリ付け又は嘗めるタイプの切手が少なくなり、シールの台紙からはがして封筒にそのまま張れるタイプのものが増え、それとともにデザインが私の偏見では”幼稚化”して、年輩の我々が気恥しくて使うのをためらうようなものが多くなりました。

切手のシール化です。

手紙をよく出す年輩者の気持ちを斟酌しないで、手紙をあまり出さない若者の趣味に合わせているとしか思えません。

いずれにしても、手紙そして郵便切手の寿命もあと十年くらいでしょうか。

それを反映してかこの頃、古切手の価格が低落気味とのことでした。